

第1回 多賀城政庁復元整備検討会 議事録

1. 開会

○事務局（県観光戦略課）

定刻となったため、ただ今から第1回多賀城政庁復元整備検討会を開催する。開催にあたり、県経済商工観光部の中谷部長から挨拶を申し上げる。

○宮城県経済商工観光部長 中谷 明博

本日はお忙しい中、多賀城整備の検討会にご参加いただき感謝申し上げます。多賀城は奈良時代に築かれた東北の政治・文化の中心地であり、長い歴史を伝える貴重な史跡である。昨年は創建1300年を迎え、南門の復元も完了した。今回の検討会では、政庁の復元だけでなく、その周辺や県全体の観光資源としての活用、仙台や松島、石巻など周辺地域との連携による魅力向上について議論する。全3回の検討会で皆様のご意見をもとに今後の施策を検討し、文化財保護の規制を踏まえながら多様なアイデアを出し合い、一緒に形にしていきたいと考えている。

○事務局（県観光戦略課）

それでは、本日第1回目の会議であるため、議事の前に、委員の皆様から自己紹介いただきたい。佐藤委員は、オンライン参加で途中からの参加となる。

○櫻井委員（東北学院大学 教授）

多賀城跡調査研究委員会に約10年間関わっており、南門の検討段階から関心を持っている。大学は現在仙台北中心部に移転したが、以前は多賀城にキャンパスがあり、毎日通っていた。地元も近く、小学校の遠足で多賀城に訪れた思い出もあり、非常に親しみのある場所である。こうした近隣の立場からも意見を述べさせていただければと思う。

○高橋委員（株式会社ミヤックス 代表取締役）

私は宮城県に本社を置く会社の3代目として事業に取り組んでいる。今回、多賀城南門前の多賀城中央公園でパークPFI制度を活用した事業運営を担当しており、継続的な経済価値の創出も視野に入れて意見を述べさせていただきたいと思う。

○他力野委員（バリューマネジメント株式会社 代表取締役）

弊社は歴史的建造物の利活用を手掛けており、先日多賀城を実際に歩いて巡った際、地図や車で見た印象とは全く違う広大さと保存の価値を実感した。駅が目の前にあり、異空間のようなその場が今後も残り続けることのすごさを強く感じている。今回の復元検討会では、多賀城の魅力をどう見せていくかが重要であり、私たちは「見せる」仕事として、その価値や本質的理解につながる方法を模索している。少しでも前進できるよう、微力ながらお手伝いさせていただきたいと思う。

○藤澤委員（東北大学総合学術博物館 教授）

専門は考古学で、特に古墳時代から多賀城が築かれる奈良時代頃までを中心に研究してきた。その関係で、県の文化財調査研究所の研究委員会にも参加している。

○松澤委員（MIRARTH ホールディングス株式会社）

私は今年4月まで三井住友銀行の公共部門におり、平成19年から宮城県庁を担当してきた。トヨタのサプライヤー誘致や震災復興での沿岸部水族館建設支援などに携わり、宮城県を第二の故郷のように感じている。歴史の専門家ではないが、観光の視点から意見を述べたいと思う。福岡県の観光審議会や太宰府市の委員も務め、大宰府政庁跡の活用についても関わってきた。こうした経験を活かし、外部からの観光視点でお役に立てればと思う。

○山田委員（JTIC.SWISS 代表）

私はスイスのツェルマット、マッターホルンの麓に住んでおり、最近ではヨーロッパとアジアを半々で行き来している。私の専門は観光が中心だが、地域振興全般や産業連携を通じて地域活性化の支援を各国・地域で行っている。本日午前中の視察を通じて感じたことも多く、皆様と意見交換できればと思っている。

2. 議事（1）多賀城の現状等

○事務局（県観光戦略課）

それでは、これより議事に移る。議事の進行は、次第に沿って、資料を基に事務局から説明を行い、その後、議事ごとに最後に委員の皆様からご意見をいただく形で進めさせていただきます。それでは早速、議事（1）史跡の現状等について、事務局から説明させていただきます。

○事務局（多賀城市市民文化創造課）

多賀城市の観光状況について、観光客入込数はコロナ後に回復し、令和6年（創建1300年）には80万人を突破。南門の復元や多賀城碑の国宝指定が追い風となった。東北歴史博物館の来館者数も同様に増加しているが、史跡エリアの入込数や宿泊者数は伸び悩んでおり、今後の課題となっている。

また、観光ボランティアガイドの活動も活発化し、多賀城創建1300年記念事業を機に案内件数が約3倍に増加。ガイド登録者も39名に増加したが、平均年齢が73.6歳と高く、後継者育成や多言語対応の強化が課題である。

最後に、資料表紙は、元教員の前川義信氏が政庁跡で北極星を撮影した写真に、AIで復元した政庁イメージを重ねたものである。

○事務局（県文化財課）

多賀城跡の整備の経緯と現状について、多賀城跡は大正11年（1922年）に史跡指定され、昭和41年（1966年）に特別史跡となった。以降、宮城県と多賀城市が役割分担し、市が公有化・維持管理を、県が発掘調査・環境整備を担当している。現時点で公有化率は約6割超、発掘・整備は約1割にとどまっている。

復元事業としては、南門の復元が中心で、平成2年に構想が始まり、震災後の平成23年に再開。令和7年には南門とガイダンス施設が公開。

また、2016年に策定された整備基本計画（～2029年）に基づき、これまで事業で一部整備を完了したが、政庁南面地区など未整備の区域も多く、今後の課題整理と検討が進行中である。

○事務局（多賀城市市民文化創造課）

多賀城市では、歴史遺産を軸にしつつ、新たな文化や観光資源を組み合わせたまちづくりを進めている。

まず、中央公園スケートパーク整備では、民間企業と連携し、国内屈指の規模のスケートボードパークを令和 8 年 3 月に開業予定。カフェやバスケットコートも併設し、若者層の来訪促進と飲食・物販の課題解決を目指している。

ソフト事業としては、多賀城創建千三百年記念式典やシルクロードランウェイ（ファッションショー）、天平衣装・鎧の復元など、歴史とアート・観光を融合した取り組みを実施。また、宮城オルレ多賀城コースが 11 月に開設予定で、文化・自然・歴史を巡る新たな体験型観光を展開している。

さらに、光と音と食のイベント「TAGAJYO YOGOTO」では 6 日間で 5 万人超を動員。あやめのライトアップ、屋外映画鑑賞会（シネマコンプレックス）、ジャズコンサート、プレミアムレストランなど、多様なイベントを開催している。

また、AR/VR アプリ「歴なび多賀城」を通じて史跡の復元や多言語対応解説を提供。キッチンカーの誘致や、GPS 音声ガイドの導入など、来訪者の利便性向上にも取り組んでいる。

○事務局（県東北歴史博物館）

東北歴史博物館では、多賀城跡の魅力を伝えるために、展示・体験・イベントを多角的に展開している。主な取組として、常設展示での多賀城詳細コーナーや多賀城炎上シアターによる歴史紹介、こども歴史館での官人衣装着付け・楽器演奏・VR 体験などがある。さらに、学芸員による現地ツアーや発掘・拓本・砂金取り体験、歴史講座などを開催し、エントランスではチラシ配布やレゴ模型展示、デジタルサイネージによる映像発信を行うことで、多賀城跡への理解促進と来訪誘導を図っている。

○事務局（県観光戦略課）

議事（1）について、事務局からの説明は以上となる。これまでの説明内容について質問等がなければ、議事（2）に入る。

2. 議事（2）エリアとして目指すべき姿

○事務局（県観光戦略課）

多賀城は宮城県の仙台と松島の上に位置し、JR 線で仙台駅から約 15 分でアクセス可能である。県内観光振興の中で、多賀城周辺には以下の役割が期待されている。

- ・仙台・松島間に新たな観光スポットを創出し、県内の滞在時間を延ばすこと。
- ・周辺の塩竈や七ヶ浜などと連携した広域的な周遊ルートを形成すること。
- ・仙台・松島とは異なる独自の価値を提供すること。

仙台は都市機能や経済のゲートウェイ、松島は自然景観のシンボルとしての役割を担う一方、多賀城は古代東北の中心地として知的探求の拠点になることが期待されている。

しかし現状、案内不足や多様なガイドニーズへの対応不足、体験コンテンツの少なさ、消費場所の欠如といった課題がある。これに対し、多賀城の歴史ストーリーの見える化、多様なガイド機能の充実、周遊環境の整備、地域経済への波及効果の創出などが解決策として挙げられる。

さらに、多賀城周辺のブランド価値としては、古代の政治・軍事・文化・交流の体感、1300 年の歴史的な歌枕、多賀城碑などの古代遺産、歴史的人物とのつながり、歴史的風致を大切にする暮らしの継承が核となると考えられる。

○事務局（県文化財課）

多賀城政庁は日本三大史跡の一つで、長年の調査や公園整備により市民に親しまれているものの、遺構の視覚的・体験的魅力や認知度、滞在型施設や体験コンテンツが不足している課題がある。これらを踏まえ、政庁復元は学術研究、教育普及、観光振興、地域振興の面で大きな意義があり、具体的には

- ①中央統治空間の可視化による学びの深化
- ②歴史空間の再現による魅力向上と観光誘致
- ③イベント拠点として地域住民の関心促進

を目的としている。

検討課題としては、政庁が提供できる価値の明確化や復元期間中の魅力発信方法、維持管理費の低減策などが挙げられる。

また、多賀城跡は特別史跡に指定されており、遺構や自然環境の保護のため文化庁の許可が必要で、現状変更は制限されるが、仮設テント設置や既存施設の改修、インフラ整備は一定の条件下で可能である。新施設は保存活用計画に基づき史跡保存が前提となる。

○事務局（県観光戦略課）

議事（2）について、事務局の説明は以上となる。この（2）のエリアとして目指すべき姿について、委員の皆様からご意見をいただきたいと思う。

○櫻井委員

多賀城の宿泊者数が伸びていないことは感じているが、無理に宿泊を増やす必要はないと考える。仙台や松島に宿泊し、その途中で立ち寄る場所として多賀城を位置づけ、食や体験などを楽しむ拠点として特化するのが良いのではないかと。松島や塩竈と広域的に連携し、かつての歴史的つながりを意識した展開が重要である。

一方で、「知的探求拠点」という表現はやや硬く、史跡の外に整備されるパーク PFI エリアは、歴史とは切り離してもよく、自由にぎわいのある場所として活用すべきである。また、多様なニーズへの対応という点は、来訪者にとって具体的に何を意味するのかが不明確で、過度に意識する必要はないと考える。東北歴史博物館から政庁跡までの散策ルートも、余計な改変をせずとも良いと考える。

歴史的には、創建当初だけでなく、伊治咎麻呂や安倍貞任のような東北側の視点から見た歴史も伝えることが大切。政庁の復元は中心部から段階的に進むと思うが、その過程を公開し、版築や槍鉋など古代技法の実演・体験を見せるコンテンツとして活かすことを期待している。

また、あやめ祭りや夜間ライトアップは非常に良い取り組みで、来場者も多く評価できる。季節を変えたイベントや、ライトアップに合わせた屋台・仮設店舗などを増やして、若い世代にも楽しめる空間づくりを進めてほしいと思う。政庁復元の場合でもライトアップや音楽イベントなどを行うことに賛成である。

○高橋委員

個別の考え方はあるが、その前に包括的な議論の枠組みが必要だと考える。そこでまず確認したいのは、「観光振興」とは具体的に何を指すのかという点である。例えば、経済的なゴールとして宮城県の総生産に占める観光の割合を何%にするのか、あるいは観光を人呼び込み地域や民間の収益につなげるためのマーケティング投資と捉えるのか、このような定量的な目標がないと、手段だけが先行してしまうと思う。そのため、観光振興を定量的にどう位置づけているのかを確認させていただきたい。

○事務局（県観光戦略課）

今のこの場では定性的な話が多いので、まずは意見を優先的にいただきたいと思う。

○高橋委員

それでは、まず詳細を説明したうえで総括的な話をさせていただく。私自身、多賀城周辺エリアの整備に関わっており、松島を終着点とした導線の中で多賀城が果たす役割は非常に重要だと考えているが、課題は「多賀城」という地名や価値がどのようにユーザーに認知されるかである。実際には多賀城・塩竈・松島を一体として認識している人は少なく、ユーザーには「松島」というブランドで価値提供する方が効果的かもしれない。

また、日本人は文化への関心が薄く、文化的価値を理解させるにはコストがかかる。したがって、国内ではなく日本文化に強い関心を持つ海外層を明確にターゲットにすることで、多賀城の文化的価値がより伝わるのではないかと考えている。皇紀2600年にわたる日本の歴史的価値も、外から見た方が魅力として際立つ可能性がある。

一方で、仙台市中心部で私が進めている事業では、人流の多さよりも、どう経済的価値につなげるかに焦点を置いており、商店街のカメラデータを活用して購買行動の再現性を高める取り組みを行っている。人を集めること自体ではなく、来訪者をどうマネタイズするかが鍵であり、これは観光施策にも共通する課題である。

したがって、観光振興も単なる集客ではなく、定量的な指標やフレームワークをもとにどのように価値を転換するかを議論する必要があると考える。

○他力野委員

多賀城エリアの役割・位置づけについて、私は京都在住で東北の外から見ており、東北の話というよりも、日本の最北端で何が起きていたのかという視点で捉えている。地元の方にとっては当たり前でも、日本全体で見ればその歴史的意義を知らない人も多いのではないか。平城宮・大宰府と並ぶ三大史跡の一つとしての多賀城も、他の史跡と同様に、近隣住民でさえ深く理解していないという現状がある。例えば大宰府では、地元福岡市の人でも訪れて初めて知ることが多く、こんなに近いのに知らなかったという声が多く聞かれる。

また、政庁跡のような場所は保存のために何もない広場として残されており、訪れるきっかけが乏しいのが実情である。だからこそ、学びや体験を通して正しく理解できる導線をつくることが重要だと感じている。多賀城でも整備が進められているが、その環境がすでに整いつつあることを、どのように内外に認知させるかが鍵である。東北歴史博物館を起点に、南門や周辺を巡るルートが存在するなど、既に学びの流れがあることを知られている状態にすることが重要である。

さらに、観光と経済の関係についても整理が必要である。多賀城をお金を落とす場所として位置づけるのか、それとも歴史の場所として認知を広げる拠点とするのか。その目的によって施策の方向性は大きく変わる。整備そのものだけでなく、何をゴールとするのかを明確にしながら、地域の歴史的価値をいかに発信していくかが今後の課題だと考えている。

○藤澤委員

多賀城をどのように位置づけていくかについては、仙台・松島との役割分担を明確にしつつ、この地が日本の北と歴史を結ぶ唯一無二の場所であるという特色を最大限に生かすことが重要だと考えている。他では体験できない、ここでしか得られない体験を打ち出すことが大切で、それは歴史的・学術的な側面に限らず、丘の上の風景を楽しむといった身近な感動からでも良いと考える。

また、多賀城は特別史跡として国宝級の価値を持つ遺跡であり、観光振興だけでなく、学術研究・教育・地域振興など多様な目的のもとに保存・活用されている。観光客が増えることで、地元の小学校の学習機会が失われるようでは本末転倒であり、保存と活用の両立、つまり持続可能な形を模索することが必要。そのためには、まず地元住民がこの史跡を誇りとし、積極的に関わるのが重要で、そうした地域の愛着が外からの来訪者にも伝わる形が理想だと考える。

観光と地域の誇りを両輪として進める好例として、沖縄の首里城を挙げられる。焼失後に地元の人々の愛着が改めて明らかになったように、多賀城も地域の心の拠り所として位置づけることが大切である。

最後に、特別史跡として国費も投入され長年整備が進められてきた経緯を踏まえ、今後は多賀城市が策定する「保存活用計画」や「整備基本計画」の見直しと整合を取りながら、全体として一貫性のある方向で進めていくことが重要だと考える。

○松澤委員

私からは、これまで関わった二つの事例を多賀城に当てはめて紹介させていただく。

一つ目は仁徳天皇陵の事例である。2019年のユネスコ世界遺産認定を機に、天皇陵の全体像をどう見せるか検討し、最終的にガス気球を用いて空から鍵穴形の全貌を見せる方法を提案した。熱気球では陵墓の大きさを捉えきれず、6年かけてガス気球の運用に至った。まだ事業の成否は見守る段階だが、空からの視点は多くの人に価値を伝える有効な手段と考えている。この手法は瀬戸内や韓国の事例もあり、多賀城とスケートパークなどとの相性も良く、恒久施設を作らずに展開できる面白いコンテンツとして期待できる。

二つ目は沖縄の勝連城の事例である。勝連城の城壁を舞台に、地元の小中学生が「肝高の阿麻和利」という現代版組踊りを熱心に演じている。プロ指導のもと、東京やニューヨーク公演も経験し、地元住民の誇りとシビックプライドにつながっている。演劇は元々引きこもり支援の目的で始まりだったが、お城と組み合わせることで教育や地域振興にも大きな効果を上げている。地域のプライドや思いを育むモデルとして、多賀城でもこうした取り組みが重要だと感じている。

○山田委員

今回の資料や多賀城市の総合計画を拝見したが、多賀城市が具体的に何を目標しているのかがよく分からなかった。学術研究、教育普及、観光振興、地域振興という4つの柱があるが、それを進めることで市民の幸福や地域の豊かさにどう結びつくのか、市役所側が明確に理解しているのか。経済面でも、予算規模や期待される経済効果（売上目標など）が示されておらず、これにより事業の方向性が曖昧になっている。また、誰が実行し、どのようにマネジメントやマーケティングを行うのかも不透明である。行政は予算制約の中で動くため、現実的な数値目標（KGIやKPI）を設定し、それに沿った事業を優先すべきだと思う。様々な施策をやりたいという声はあるものの、予算が限られているなら選択と集中が必要である。このあたりについて、市の明確な経済政策や数値目標があるのか、それがないと現状把握と数値化を含めた議論を進める必要があると思うが、いかがか。

○事務局（多賀城市市民文化創造課）

この検討会の前段となる総合計画では、多賀城市が目指しているのは市民のシビックプライドを高め、このまちを誇りに思う市民を増やすことである。しかし、経済効果の具体的な数値目標はまだ明確に示していない。現在進めている構想と総合計画の見直しを連携させながら、経済効果も含めて整理していく必要があると考えている。委員のご指摘を踏まえ、今後は経済的な目標をしっかりと捉えて総合計画を見直していく流れになると思う。

○山田委員

それでは、数値目標を含めて私たちが検討する必要があるということか。それによって、例えば松澤委員が提案した熱気球の運行回数も変わってくる。イベントは重要だが、それだけでなく、多様な収益源やマネタイズ策も検討しなければならない。復元事業だけでなく、その前段階の取り組みも計画に組み込み、最低限の目標や具体的な時期を設定することが必要である。復元の進行に合わせて、5年や10年といった時間を設けないと、先延ばしになる恐れがある。

○事務局（経済商工観光部）

このエリアには県・市・民間など多くの主体が関わっており、整備や復元、維持管理の役割が分かれているため、連携が不可欠である。現状は十分な体制とは言えないものの、この検討会を通じて、観光や文化・歴史の面を含め、関係者が一体となって今後の方向性や数値目標を整理していきたい。また、委員からの厳しい意見も受け止め、率直な意見交換の場としていただきたい。

○山田委員

28ページに市民・県民に親しまれているとあるが、具体的にどの程度親しまれているのか。例えばイベントで5万人の集客を記載があるが、その来場者が市民中心なのか、観光客中心なのか、実態は把握できているか。

○事務局（多賀城市市民文化創造課）

市の取り組みとして、光のインスタレーションやあやめ祭りのライトアップを実施しており、今年度は約2万8,000人が来場している。そのうち約6割が市民、4割が市外からの来訪者で、地元だけでなく仙台などからも若者が訪れるイベントとなっている。

○山田委員

「6：4」の根拠は。

○事務局（多賀城市市民文化創造課）

会場で来場者に満足度や来訪地を確認するポスターを掲示し、概数を把握している。

○山田委員

観光振興では来訪者数だけでなく、一人あたりの消費を増やし、地域経済全体に効果を波及させることが重要である。同時に、首里城の事例のように地域住民の誇りや愛着を育てるインターナルマネジメントも必要で、文化財に対する地域の愛着を深める仕組みづくりを考えるべきだと思う。

○佐藤委員

私は地元の青年部に所属しており、今回の参加を通じて、地域のアイデンティティはこれから作り上げていくものだと感じている。この機会に地域への愛着を高め、住民と共存共栄できる関係を築きたいと思う。前回の現地視察でも改めて、地元の歴史や施設の価値を地域の人々に再認識してもらうことが重要だと感じた。こうした意識改革を進めながら、受け入れ体制も整え、地域住民として何ができるかをこの検討を通じて考えていきたいと思う。

○事務局（県観光戦略課）

それでは、議題の（３）に移る。

2. 議事（３）周遊エリアの現状・課題

○事務局（県観光戦略課）

議事（３）では多賀城周辺エリアの現状と課題について事務局から説明する。主な課題は以下の通りである。

- ・多賀城跡管理事務所の来訪者向け活用方法。
 - ・城前官衙のイベント活用や魅力発信、飲食・物販機能の充実。
 - ・史跡の案内表示が目立たず、来訪者に伝わりにくいこと。
 - ・政庁南門前を市道が分断している問題。
 - ・国宝・多賀城碑の風化防止や魅力的な展示方法、防犯対策。
 - ・老朽化した浮島収蔵庫の再利用や跡地活用の可能性。
 - ・館前遺跡の復元整備やゲートウェイとしての役割強化。
 - ・東北歴史博物館と政庁跡、ガイダンス施設の連携強化。
 - ・周遊ルートにおける案内表示の不足や不統一、情報伝達の課題。
- （「オルレ」の統一的な案内デザインの導入提案）

○櫻井委員

集会所については、来訪者向けに開放する必要はあまりなく、立派なガイダンス施設があるので、そこを起点にルートを設定すれば問題ないと考えている。城前官衙では、映画上映会やジャズコンサートなど多様なイベントが行われており、アートフェスティバルのような屋外芸術祭も開催できれば魅力的だと思う。夜景やライトアップを活用し、石巻のリボンアート・フェスティバルのような周遊型イベントができると良いと感じている。

浮島収蔵庫は老朽化が進んでいるため再利用は難しく、取り壊した後は建物を建てずに、あやめ園と連続した開放的な空間として残すのが望ましいと考えている。

東北歴史博物館と政庁跡を結ぶ周遊ルートのソフト面（コンテンツ作り）にもう少し力を入れ、博物館の充実した内容と実物をボランティアと連携して効果的に伝える体制を強化すべきだと思う。

多賀城碑については、現状のまま保存するのが良く、風化を完全に止める方法は分からないため、覆屋で保護し、重要なイベント時のみ公開するのが適切。詳細な資料は埋蔵文化財調査センターのレプリカなどに誘導する形が望ましいと考える。

○佐藤委員

集会所は日常的に利用しているが老朽化が進んでいる。今後は、史跡周辺の住民が作る農作物などを集会所前で販売し、地域の賑わいづくりやアイデンティティ醸成の場として活用することが考えられる。また、今後多賀城で開催される「オルレ」イベントのルート上にエイドステーション的な場所を設け、地元の野菜や新米の販売を試行的に行い、地域の意識向上にもつなげていく予定である。

○高橋委員

ハード面での整備については、市道による分断が大きな課題であり、どんなイベントを行っても動線が途切れてしまうため、ここの整備が必要だと考えている。一方で、観光客の消費動向を考えると、多賀城単体での集客やマネタイズには限界がある。より宿泊施設があればマネタイズに繋がる可能性がある。多賀城、塩竈、松島の3エリアの役割を明確にし、それぞれの強みを活かした広域連携の視点が重要である。東北歴史博物館は年間20万人を集める大きな拠点であり、ここを起点に多様なターゲットに向けた企画を展開し、マーケティングを強化して顧客満足度を高めることが効果的である。しかし、現在は企画と地域の連動性が弱いため、連携強化のための組織づくりなど仕組み作りも検討すべきだと考えている。次回以降、こうした定量的な分析や検討案も整理して議論を進めたいと思う。

○他力野委員

管理事務所は重要な場所にあり、広い史跡敷地内でトイレや休憩所としての機能が求められている。新たな建築は難しいため、既存施設を有効活用し、無人の休憩所や自販機の充実、物販や飲食のスポット利用が現実的である。ただし、人員を常駐させると収支が難しくなるため、無人運用を基本とした整備が望ましいと考える。

史跡の案内については、多様な歴史の中から主軸となる時代を明確にし、現地ではその時代を体感できる展示に集約し、詳しい情報はガイダンス施設や博物館に任せるのが効果的である。

浮島収蔵庫は耐震面の課題があり、建築コストと回収のバランスが厳しいため、建物の大規模な改修は避けたほうが良く、場所を活かした活用にとどめるべきである。

周遊ルートについては、案内がなくても楽しめる工夫が必要で、とくに東北歴史博物館を拠点としたガイダンス体制の整備が重要。専用スペースや自動案内を館内に設け、来訪者がスムーズに周遊できる流れを作るべきである。

また、スマホアプリやIoTビーコンなどを活用し、訪問者にリアルタイムで情報提供ができる仕掛けを導入することで、個人でも楽しめる環境を整えることが望ましいと考える。

○藤澤委員

特別史跡のトイレなどの便益施設は通常、指定範囲の外側に設置されるが、多賀城跡は広大なためトイレの位置が遠くなりがちである。史跡を保存しつつ、どこに配置するか全体的な検討が必要であり、既存施設の活用だけで足りるかも考慮すべきである。

東北歴史博物館を拠点にした周遊コースの充実は期待されるが、オルレなど新たなルートもできるため、地元の車社会の事情も踏まえ、中央公園南側の駐車場を利用する地元利用者の動線も考慮しながら、サインの統一や便益施設の配置計画を進める必要がある。史跡保存とのバランスをとりつつ、多様な人の流れを想定した計画が求められる。

また、旧東北歴史資料館の収蔵庫には県の発掘調査資料が多く保管されており、博物館の企画展にも活用されているため、近くにあるのは便利である。しかし老朽化も進んでいるため、代替機能や今後のあり方についても検討が必要と考えられる。

○松澤委員

現時点では、復元のスケジュールや規模が明確でないため、配置について具体的な意見は持ちにくいと考えている。もし行政が 100 万円を出すので民間でできる事業はあるか、といった具体的な話であれば個別対応は可能だが、配置などは今後メインの議論が進んでから検討すべきだと思う。

○山田委員

周辺整備は全体の戦略と KGI の設定次第で方向性が決まるため、まずは 5 年・10 年単位のゴールを明確にする必要がある。実際に現地を歩くと、市道の分断や電柱の存在で景観が損なわれており、無電柱化や地下インフラ整備が必要だと感じた。案内看板については、QR コードを活用してスマホで詳細情報を得られるようにするなど、すぐ実行できる改善が有効である。また、ガイドについては観光庁の人材育成事業も活用し、有償でも質の高いガイド育成を検討すべきである。収蔵庫の活用は難しいものの、これも戦略次第で方向性を決めるべきである。多賀城を愛する人たちを核に戦略を取って「推し活」的な仕組みを作り、継続的に愛される運営を目指すことが重要だと思う。

3. その他

○事務局（県観光戦略課）

以上で議事を終了とする。最後に次第の 3 番「その他」について、意見等はあるか。

○事務局（経済商工観光部）

多賀城碑の取り扱いについて、先ほど委員の皆様方から、うまく活用しておられるような他の事例等について話があったが、少し時間もあるため、意見があればお願いしたい。

○他力野委員

初めて多賀城碑を見た際、国宝が野ざらしのように感じられ、風化の進行を懸念した。貴重な文化財として、ガラスで囲うなど保護と価値を示す工夫が必要だと思う。また、「本物を見る体験」自体が感動を生むため、先日のように特別公開を定期的に行い、ガイド解説付きで開かずの扉が開く瞬間を演出するなど、一般の人にも国宝の価値を実感できる体験型の仕組みを整えるべきだと感じた。

○事務局（県観光戦略課）

その他、この国宝の件で意見はあるか。

○藤澤委員

多賀城碑は、ここに長く存在してきた歴史や保存に尽力してきた人々の思いがあるため、できる限り現地で保存すべきだと思う。ただし、風化対策には科学的な調査が不可欠で、覆屋内部の温湿度やリスクを正確に把握した上で対応を検討する必要がある。ガラスで覆うなどの措置も、環境を悪化させる可能性があるため慎重に判断すべきである。防犯面では監視カメラの整備などを検討しつつ、可能な限り実物を現地に残し、科学的根拠に基づく保存策を講じることが重要だと考える。

○事務局（県観光戦略課）

その他に意見等がなければ、資料の背表紙「心震える感動体験をあなたに」について、多賀城市から趣旨を簡単に説明いただきたいと思う。

○事務局（多賀城市市民文化創造課）

多賀城市がまとめたこのストーリー案は、多賀城政庁の丘で感じる風や色、草花などを通して、1300 年前と今がつながる「時間を超えた体験」ができる場所であることを表現している。また、多賀城碑には朝廷と地元の人々の交流など、多くの歴史的背景が込められており、その流れを未来へとつなぐ思いを込めている。さらに、古代から多くの文人墨客がこの地に感動し、作品として残してきたように、文化人に選ばれる特別な場所として、多賀城の価値を未来に伝えていくことを目指す内容となっている。

4. 閉会

○事務局（県観光戦略課）

それでは、予定をしていた時間となったため、これをもって第 1 回多賀城政庁復元整備検討会を終了とする。なお、次回の第 2 回検討会は来月 11 月 26 日に開催予定である。調整については、別途ご案内する。